

やすらぎ

平成19年・6月号・250円

「人は、谷を埋めるくらいの財産を持っていたとしても、もう一つの谷を埋めるだけのものを求める。」p.24



浪費と吝嗇の間の中道—無駄遣いせずつましく生きること

英知と徳

危機一髪「閉所からの脱出」



今月号 内容

節約や儉約に励む主婦を取り上げるテレビ番組が時折放映されます。特に新しい話題ではありませんが、その工夫ぶりや頑張り具合を紹介する間に家族の生活や絆などが盛り込まれ、見ている側は感心したり感化されたり、ほのぼのとした気分になったりして、安定した人気があるのでしょう。その他のメディアでも料理レシピなど家事に関して節約を謳う記事や特集は定番で、特に一家の家計を握る主婦にとって節約や無駄を排することは大きな役割の一つとも言えそうです。最大の動機はといえば、決まった収入の中でやり繰りし、欲しいものを購入するための資金を捻出すること、でしょうか。

ある国を旅行して現地の普通の人々の暮らしぶりを垣間見た後、帰国して日本のものの溢れ具合に驚いたことがあります。町を歩けば種類も豊富な商品がずらりと並び、消費欲を刺激する広告がそこかしこに掲げられています。自宅はといえば使わないものも含め物がごちゃごちゃと増え続けていく始末です。旅行先で滞在したところは日本と比べて確かに金銭的には豊かではなく娯楽も多くはありませんでしたが、必要なものだけに囲まれて人同士の絆を楽しみながらゆったりと生活していた様子がその後もずっと印象に残っています。

日本に住む私たちが物質面で恵まれていることはありがたいことで感謝しないとイケないです。ただものというのはさらに良いもの、さらに面白いもの、さらに美味しいものと欲望が増え続けて留まるところを知らないのが怖いところです。便利や安楽に慣れすぎるといつの間にか自分自身がものに支配される状態となり、感謝を失い、不平不満が募る一方となりかねません。日々節約術に取り組む中で、足るを知ること、慎み深さを忘れないこと、そしてものの奴隷=欲望の奴隷とならないことを心がけるということも、頭の片隅に入れないとイケないものだと思います。

- ❧ 編集部より 2
- ❧ 心を知る
ヤキーン (確信) 3
- ❧ 預言者ムハンマドを語る
アッラーの命令を人間に伝えること 6
- ❧ 英知と徳 8
- ❧ リサーレイヌールより
「年老いた人々へのメッセージ」 10
- ❧ 危機一髪 閉所からの脱出 14
- ❧ 映画から考える
『チャーリーとチョコレート工場』Charlie
and the Chocolate Factory 16
- ❧ ダーウィン説 18
- ❧ 祈りのある毎日へ 23
- ❧ チョパンサラダ 23
- ❧ 浪費と吝嗇の間の中道—無駄遣いせずつま
しく生きること 24





ヤキーン(確信)¹

ヤキーン(確信)とは物事の真実について全く疑いをもたないこと、そして厳密な検証を経て正確な間違いのない知識に到達することです。この言葉は、検証、真実を求めること、究明すること、そして確信に到達するためにたゆまざる努力を続けることをも意味するのに使われますが、確信とは道の途上にある旅人が到達し経験した精神的段階を指します。これは内心で進歩し発展する生得の能力をもった者のみが獲得できます。この用語は、無限で増減がありえないアッラー自身の知識については使われません。アッラーは「確信を持つお方、確信を与えるお方」として知られるもような名前を持っておられません。加えて、確信は以前疑いを持たれていた物事に関して研究や検証を加えることによって到達される度合いです。アッラーは疑念もなければ検証を必要ともしません。

真実を追究する学者たちによれば、ヤキーンは、まず第一にアッラーの存在や唯一性に関して人が疑いなく持つ信仰を含め、信仰の本質的要素の中に示された真実に関する確信や信念を意味します。また、一般的に人々が信じているこうした本質的要素の原型や真実を観察したり経験したりすることによって確信に到達し、物質的なものを超越した領域を認識し理解すること、とも定義されます。

確信はまた、あらゆる知識源、観察方法や洞察力を駆使して到達することのできる、終着点もしくは始発点とみなすこともできるかもしれません。この地点に達した旅人は高い頻度で永遠なるものに向けて出港し、心の中で上昇を実感し、「(かれの)視線は吸い寄せられ、また(不躰に)度を過ごすこともない。(星(アン・ナジウム)章 17節)」という地平に至るのです。その旅人は物質界でも非物質的な世界でも、アッラーが顕現している中を進み、至高の印(に含まれた真実)を話すための舌、見るための目、聞くための耳を与えられるという計らいを得るのです。すなわち、宇宙という書や、そこに包含される物事、事象を繰り返し観察し研究することによって、永遠性に向かう旅人はアッラー特有の物事や事象に刻まれた無比の印の意味を読み取ることができるようになるのです。

学びのために外界そして精神界に映し出される光景を繰り返し観察し熟考することによって、可視の世界を超越した真実が旅人に明かされるようになります。また、神聖な啓示すなわちクルアーンとスンナの光り輝く神秘的な空気に包まれて生きることによって、旅人は心の中の隠された秘宝が顕示されるのを感じます。信仰者は自身の良心のプリズムから発せられる表象や印に気づき、経験することとなります。その良心とは、外界や自身の精神界そして神の啓示からもたらされる神聖な贈り物の光線を反射し、それらを人の感覚や精神機能に送る役目を果たします。この意味と度合いにおいて確信は、アッラーが彼に近い人々に好意として与える贈り物であるといえるでしょう。

¹ この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

確信とは大変強力なものであるため、最低限しか存在しないとしても、心を光で満たし、疑いの霧を払い、歓喜や満足、爽快さをもたらすそよ風が人の精神界に吹き込まれるのです。ズンヌーン・ミスリが指摘しているように、確信によって心は永遠性に到達したいという願望で満ち溢れるのです。このことは禁欲的な生活を営もうとする欲求を生じさせます。なぜなら禁欲主義によって人は賢明に考え話そうとするようになるからです。禁欲主義の翼を身につけ英知の領域に飛び立つ者は、結末がどうなるかを決して忘れず、常に来世を頭に入れ、たとえ他の人々と共に過ごしていたとしてもアッラーと一緒におられることを常に感じているのです。

確信の初期段階においては、存在の物質的側面と非物質的側面の間にある覆いを取り除かれ始めます。さらに数歩進むと旅人は物質界を超越した領域を明確に理解するようになります。心がアッラーの顕示で満たされると、それによって平安と満足感の獲得がもたらされ

その旅人は物質界でも非物質的な世界でも、アッラーが顕現している中を進み、至高の印(に含まれた真実)を話すための舌、見るための目、聞くための耳を与えられるという計らいを得るのです。

のですが、信仰者は信仰の真実に関するあらゆる疑いから解き放たれます。アリー・イブン・アビー＝ターリブ(アッラーが彼に満足し給いますように)のように、このレベルの確信を得た者はこのように宣言するでしょう。「たとえ可視と不可視の間の覆いを取り払われたとしても、私の確信が増すことはないだろう。」さらにもう数歩進んだ段階では、目で見ただけでもなく耳で聞いたこともなく、心で感知したことのない神からの贈り物である純粋な世界を人は旅します。

確信を得るため、旅を始めようとする入門者はそこに到達するのに必要な事柄に取り組む努力が必要です。しかしながら、アッラーが恩恵もしくは贈り物というかたちでそれを授けてくれたときのみ人はこの段階に達することができるのです。アッラーについての相当の知識を獲得することなしに人が確信に達することはできません。アッラーの知識は以下の事柄を通じて獲得することができます。物事・事象に関して正しいものの見方や認識をすること。正確かつバランスのとれた考え方ができること。意図が純粋であること。アッラーの存在や唯一性についての印を学ぶこと。そして、アッラーの振る舞い、アッラーの美名や属性が現れたものについて熟考することです。アッラーに関する知識は初学者の精神界と外界を照らす光であり、存在の至るところから放たれる光です。この光の輝きの下で初学者はすべてをその真実の姿として目にし、(物事や事象の)多様さという枠から解放され、アッラーの唯一性を明確に理解し、得も言われぬ精神的歓喜に酔いしれるのです。

初学者は確信に至る道のりの最初の段階にいるうちは不安を感じることもあるかもしれませんが、道の終わりでは想像を絶する快樂と平安の中にどっぷりと浸かっていることでしょう。当初受けた感覚と最後に得た経験の違いを見分けることができないと、確信は危険だと誤った結論付けをしてしまいます。しかしアッラーが共におられること、そしてそれから生じる精神的な歓喜を常に感じ取ることができる者は、あらゆる精神的な苦しみや何かしらの狂いからも平和そして安心感を享受することができるのです。不安や苦悩は初期にのみ感じられるものです。確信が危険を伴うものだという点についていえば、どの段階でも旅人はある程度の危険を突きつけら

れるのです。預言者(彼に祝福と平安あれ)も断言しておられます。「もしアッラーが私に慈悲をかけてくださらなかったら、私でさえ(地獄の業火や自身の行いに応じて受けるアッラーの懲罰から)救われることはないでしょう」と。苦悩や逸脱の恐れがなく平安を手に入れることは、アッラーが確信に対してもたらして下さる新鮮な果実なのです。

クルアーンのいくつかの節で言及されているように、イスラーム神秘主義者たちは確信を三つの範疇に分類しています。

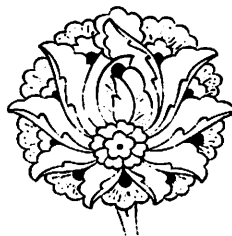
一知識からもたらされる確信。信仰のあらゆる本質的要素や一義的にアッラーの存在と唯一性に関して、それらとかかわりのある印や証拠を正しく観察、研究することを通じて、強固で確固たる信条、信念を持っていること。

一直接の観察や見ることを通じて得られる確信。一般的な信徒には見ることができず、また信仰の本質的要素の基盤となる、非物質的な真実の覆いはずし、それを観察することによって獲得される、絶対的な確信とアッラーの知識を持っていること。

一直観的確信。アッラーが常に一緒にいてくださるという寵愛^{ちゆうあい}を受けていることであり、何の覆いもなく、この恩恵を授けられた者だけが感知できる形でそれはなされている。これをアッラーの中で心が無となり、アッラーによって生かされている状態と解釈する者もいる。

これら確信の三つの範疇は次の例によってまとめられるでしょう。生物学的な文脈で体を観察したり研究することによって得られる死に関する知識(死の前に持っているもの)は、知識からくる確信の例として喩えられるでしょう。人の魂を抜き取りにやってきた天使を見ることや墓という中間に位置する世界を垣間見るといった霊的な現象を目撃することは、直接的な観察からくる確信の一種として捉えられましょう。実際に死を経験することによって得られる確信は、直観的確信です。

例えば直接的な観察からもたらされるアッラーの美名や属性の本質といった抽象的な真理に関する確信は、個人的な経験と関連があります。それゆえ、これは私の説明能力を超えたものなのです。





アッラーの命令を人間に伝えること

預言者たちの三つめの特質は、教えの伝達を行なう点である。これは、イスラームの「**真実を説明すること、もしくは善悪を教えること**」ということもできる。意味に違いはない。

イスラームの真実を説明することは、預言者たちの存在の目的である。それがなければ、預言者たちが遣わされたことも無意味で不必要なものになってしまう。アッラーは、人間に対する慈愛を預言者たちによって具現化され、彼らの人生によってその慈悲を示されているのである。これらが人々に伝わるためには、教えが説かれることが必要となる。

例えば、アッラーは毎日我々に微笑むこの太陽をこの地にくださり、その慈悲を示されておられる。太陽は、温まるべきものにはストーブであり、さまざまな色の美しい者たちの周囲では刷毛のようでもある。同様に、預言者たちもアッラーの慈悲と、慈愛を示しているのである。彼ら、特に「**あなたをこの世に慈悲として遣わした**」(預言者章 21/107)と言われた預言者ムハンマドは、人間にとってアッラーの慈悲と自愛の象徴である。つまり、このお方が遣わされていないならば、そして他の預言者たちの教えを新たにしていなければ、我々はアッラーの慈悲にふさわしい存在であることはできなかつたであろう。無知、憎悪、過ちのみがある未開の砂漠で、誰にも頼れず、当惑の中で過ごすことになったであろう。

人間たちは恐れの中にある時、ムハンマドやその他の預言者たちに命を与える息を聞いた。その音を聞いて、自分たちを天国の庭に見出すことができたのである。そうでなければ、恐れと孤独のうちに死に絶えていたであろう。

我々は誰であるのか？ どこから来て、どこへ行くのか？ この恐ろしい問いは、常に我々の頭を悩ませ、それをつぶすところであつた。我々はその答えを見つけることができず、その痛みを人生を通して味わわなければならないところであつた。墓場の、腐敗した死体…。それらを思い浮かべては恐れをなし、心が暗い恐怖に満たされていただろう。さらに、無について、無に帰るといふことについての考え、全ての瞬間において我々は少しずつ無に近づいているという考えは、人生を苦しみに変えていただろう。

**「あなたをこの世に
慈悲として遣わした」**

(預言者章 21/107)

預言者たちはそこに現れて、我々に人生の目的を教え死の真実を説明したのである。それで我々は、我々がこの世に生まれてきたことに目的があると同様、我々がこの世界を去ることに理由があるということ学んだ。死は、無ではなく、ただ場所を変えることであり、自分の任務から解き放たれるということである。墓場は、あの世へと開かれた扉であり、待合室のようなものである。我々はこれらのことを預

言者たちから学び、恐れから自由になった。頭や心を満たしていた全ての不安と恐怖はぬぐわれ、その代わりに喜びに満たされたのである。

預言者たちが、我々にこのようなメッセージを伝えたのだ。そして、このメッセージを我々に伝えることが、彼らの存在の目的である。我々は、教えの伝達の任務を、義務であり責任だと感じで行っている。預言者たちはそれを彼らが生きている目的であるとみなし、神意であるという意識のうちに行なう。そして言うのである。「我々がこの世に存在することの理由は他には何もない。アッラーは我々をこの人々の元に遣わされたのであり、彼らの周りを闇から光に変えなければならない。彼らがこの光の道からそれることなく歩いていけるように。シャイターンが彼らの心に入り込むことがないように。彼らも、その長い旅路で、道に迷ってしまうことがないように」

繰り返すが、我々は布教を義務として行なうのに対し、預言者たちは自分たちが創造された意図とみなし、それを行なうのである。





徳は、民衆の中にあつてクッションや床に腰をおろす。うぬぼれは、巨大なソファーにすら収まりきれない。うぬぼれが、モスクのドームの形状を持ちさかさまになった井戸に似せられるとすれば、徳は、地平線にまで降り立ったように見える天空に似せることができるだろう。

無知はうぬぼれへ、英知は徳へと導く。うぬぼれは無知の不義の子であり、徳は英知の正当な血筋から生まれる子息である。うぬぼれは暴政の見方であり、徳は自由と平等の見方である。

うぬぼれはいつでも孤独の中でうろつき、同類を探す。徳は仲間を見つけた安らぎの中にあがり、いつでも人々と共にある。

「強制によって美はなしえられない。」と言われるが、事実である。偉大さも、強制によってなしえられない。これらは二つとも、集団の良心が定めるものである。

自分たちを気に入る人のことを「楽観的」、気に入らない人のことを「悲観的」だと見なす人々もいる。この人たちは前者を評価し、彼らには心を開くが後者は遠ざける。本当に遠ざけられるべきなのは、まさにこの利己主義なのだ。

楽観主義は全てを善と見なし、悲観主義はすべてを悪と見なす。これらは二つとも有害である。善を善と、悪を悪と見なすことが「真実主義」なのである。

徳

永遠にまで続いていくであろうあなたの魂のため、常に新たな名誉や地位を求めなさい。あなたが得た尊厳を失わないために、いつでも注意深くありなさい。

一つの社会において、醜悪なものや醜悪さの台頭、発展に対し注意が払われていないのなら、素晴らしいものや美が山賊のように追われているなら、真実や徳への熱望が非難され抑圧されているなら、非道徳がどこにでも浸透していけるなら、その国で徳のために生きようとする人々にとっては、地の下の方が地上よりもよいものとなろう。

徳とは、人間たちが評価し、動物たちが好まないようなもの、恥とは、人間たちが恐れおのいて遠ざかり、動物たちが気にも留めずに行なうような振る舞いと言われている。まさにそのとおりである。

宗教、民族、故郷、誉れ、そして国家のような崇高な概念に対し抱かれる強い思慕の情は、誠実な魂によるものである。それらは、この崇高な真実を侵害せず、また侵害させることもない。必要とあれば躊躇なく、喜んでその魂を犠牲とする。このような魂の崇高さを手にしていない不運な人々が、これを愚かと呼ぶのである。

徳は、いくつかの状態や条件下にあつては、損害をもたらすことがあるが、それでもやはり徳である。それをつまらないものだと見なし後悔することは、どの場合でも不正である。徳によって害がもたらされたのなら、やはり徳によってそれを退けようと努めるべきである。

徳は、正当に与えられた敬意に対してすら重要性を示さないことであり、うぬぼれとはふさわしくない状況においてすら、敬意を期待する魂の状態である。徳が話す時はうぬぼれは利己主義の懐に隠れつつ、苦しみながらそれを聞く。

過去の偉大な人々を善と共に思い起こすことは、彼らが持つ権利でもあり、私たちにとっても尊さを理解していることのしるしとなる。なぜなら彼らは、民族に誉れを獲得させる根のようであるからだ。その根を腐らせようとすることは、民族をその栄誉ある過去に対し怖がらせ、それから遠ざけようとする事なのだ。

正しい人々を評価し、敬意を込めて思い起こす人たちは、いつの日か必ず、敬意を込めて思い起こされるようになるだろう。評価されている人々への批判や中傷によって有名になろうとする人たちは、この上なく悪い評価を得るであろう。

自らを知ることは先見の明であるが、自らを見ることは、何も見ないことである。自らを知る者は、神にも人々にも接近することができる。自らを見るものは、エゴイズム以外の全てから遠ざかることになる。

過去の過ちを評価し、それを生かし、そして過去の人たちを一定の基準で許し、そのことに時間を費やしすぎないことは、賢明な振る舞いである。不必要に過去や過去にあった事柄を中傷することは、賢明ではない行為である。





年老いた人々へのメッセージ

16番目の希望

ある時、年をとっていたが、エスキシェルの刑務所から1年の刑を終え、出所した。そしてカスタモヌ（トルコの町）へ流刑された。警察署で2、3ヶ月滞在していた。私のように忠実な友達にさえ会うのにさえ遠慮して、孤独を好み、（オスマン的な）衣服を取りかえることにさえ我慢できなかったものが、どれほどの困難を感じるかは理解できるであろう。さよう、私がこのように絶望の最中に入ったとき、神の援助が私の老い対し救いに駆けつけた。その警察所の警部は警察官と共に私の忠実な友となった。彼らは一度も私が帽子をかぶることに忠告しなかったし、私の召使いのように私の好きなときに町を散歩させてくれた。

その後その警察署の向かいのマドラサ(学び舎)で、「光の書簡集」を書き始めた。フェイズィ、エミン、ヒルミー、サーディク、ナーズィフ、サラハッディーンのような「光の書簡集」の勇敢な教え子達は、そのマドラサ(学び舎)に「光の書簡集」を出版し複写するために続けて出かけていた。そこでは、若い時、昔の教え子達と共に語られた価値ある知識についての議論がよりきらめく形で展開されていた。

その後、姿の見えない敵達の役人数人と一部の尊大な先生達が私達について妄想を抱いた。それから、デニズリ（トルコの町）の刑務所に、5、6地方から連行された「光の書簡集」の学徒達と共に、ユースフの学び舎^{*}において結集する結果と相成った。

私達のたのみとなる重要な書簡集、特にスフヤーナとヌールに関する便りを私は炭とまきの下に隠した。私の死後、又は政府期間の役人達が真実に耳を傾け知性を取り戻した後、出版されるようにと考え、気持ちを楽に持とうとしていたとき、突然捜査官と専門調査官が家を手入れた。その隠された重要な便りの数々もまきの下から発見された。私を逮捕し、体の具合がよくなかったのだが、イスパルタ（トルコの町）の刑務所へ送った。私は大変悲惨で、「光の書簡集」を襲う害のある恐ろしい悲しみに沈んでいる時、主の恩寵が救助に駆けつけた。その隠されていた重要な書簡集を政府期間の人々が注意深く、関心を持って読み始めたのである。政府のこの役所は光の書簡集を学ぶ中心地となった。デニズリでもまた私達が知らないところで、思いもかけないことではあったが、役人、又は役人でない人々を問わず、数多くの人々が「最も偉大な印」という書を読んだ。彼らの信仰は強くなり、私達たちの刑務所での、困難さは無と化した。

その後、デニズリの刑務所から私達は連れ出された。私を誰とも会わせないように監禁し、私は悪臭のある湿っぽい寒い部屋に閉じ込められた。老いと病と私のために無実の罪で抑圧された友人達を目にしたために大変不幸せであった。そして光の書簡集の押収とその活動の停止という最も苦痛を味わっていたとき、神の援助が突然救助に駆けつけた。

巨大な刑務所を光の書簡集の学び舎と変えた。ユースフの学び舎となし、ザフラのマドラサの勇者達はダイヤモンドのペンによって、光の便りを書き始めた。

* ユースフ預言者も一時期刑務所に入っていたことがあったので、刑務所を「ユースフの学び舎」とよんでいます。

さらに、その厳しい規則の中で、光の勇者達は3、4ヶ月間に20以上も「信仰の果実」と「弁護弁論」を書き上げた。刑務所でも外でも勝利を手にし始めた。私達にとって、困難だった害が、大きな益を齎した。私達の苦悩は喜びへと変わった。「・・・自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。・・・(2章・216節)」の神秘が再び示された。

その後、最初の専門審議委員会が間違った表面的な報告を提出したため、残忍な教育者達の攻撃とともに、私に厳しい非難の目がむけられた。私達について出版された報告書によって、さらには様々なやり方によって、私達の一部の者を継続的に監禁しつづけようとしていた時、神の援助が救助に駆けつけた。はじめにアンカラ(トルコの町)の専門審議委員会の厳しい批判を予想していたが、彼らは(正しく評価し)称讃の報告書を送ってきた。さらに、五箱の「光の書簡集」の中で、5から10のあやまちを彼らは見出した。裁判で彼らが間違いであると示したそれぞれのポイントは完璧に真実であったこと、そして彼らが間違いだと述べたことの中で、彼ら自身が間違いを犯していたことを私達は立証した。さらに、五頁の報告書の中で、5から10の間違いを私達は指摘し、7人の政府の役人に送った「信仰の果実」と「弁護弁論」による効力のある力強い平手打ちに対して、威嚇的な厳しい命令を予想していたのだが、彼らは非常に情け深く、まるで慰めているかのようであった。総理大臣が私達に送った手紙のように、彼らは和平的で何の口も挟まなかった。これらがハッキリとした証明となるが、「光の書簡集」の真実が神の恩寵である奇跡によって、彼らを負かせ、彼らの案内役として、それらの論文を彼らに学ばせ、その広い役所がある種の学び舎となし、優柔不断な、まごついている人々の信仰を救い、そして私の苦難より以上の喜びと益を私にあたえた。

その後、姿を見せない敵達は私に毒を盛った。そして、ハーフィズ アリは、私の身代わりに病院へ行き、私が行くはずだったバルザフ(審判の日まで魂が置かれる状態)の世界へ旅だった。そのことが私達を絶望させ、嘆き悲しませた。私はこの苦難が起こる前に、カスタモヌの山で叫びながら何度も何度も繰り返し語った。

「兄弟たちよ、馬に肉を、ライオンに草を上げないで下さい、」と。つまり、「光の便りを全ての人に与えないで下さい。少なくとも私達がそれらによって攻撃を受けることがないように、」ということである。

徒歩で7日間ほどかかる場所にいたハーフィズ アリも(彼に神の慈悲がありますように)心の電話によって聞いているかのように、ちょうど同じころ私に次のように書いている。「そのとおりです、先生。ライオンに草は与えられるべきではありません。おそらく、馬に草をライオンには肉があたえられるべきです。そしてライオンのような先生に誠実な便りを与えた。」7日後その手紙を私達は手にした。数えてみれば、私がちょうど山で叫んでいた同じころ、彼もこの驚く言葉を手紙に書いていたようだ。

さよう、このような「光の書簡集」の精神的な勇者達の死と姿を現さない偽善者達が私達に向けた批判によって、私達を罰しようとしたことと、私が毒により病気になるために、私をも病院へ行かせるように、公的命令が下され、私は行かなければならないという心配が私たちを悩ませている時、突然神の援助が救助に駆けつけた。聖なる兄弟達の心からの純粋な祈りによって、毒による危険は去った。その亡き殉教者達の力強い印によって、その墓の中で「光の書簡集」によって忙しく時を過ごし、そして、天使達の質問に「光の書簡集」と共に返答していることによって、彼の代わりに彼の体系にしたがって、「光の書簡集」のために活動するデニズリの勇者ハサンと彼の友人達がひそかに影響力を与え、光りの学徒達に奉仕したことによって、さら「私達の敵であった監獄囚達でさえ「光の書簡集」によって改善され私達が刑務所から釈放されるように援助したことと洞窟の仲間達(Ashab-i Kehf)のように光の学徒達と共にその厳しい試

練の場所をかつて修行した人々の住む洞穴に変えたことによって、そして心を休めるために光の書簡集をひろめ、書き上げた努力によって、主の恩寵が救助に駆けつけたことを証明した。

そしてさらに、私の心に沸き起こってきたのだが、そもそもイマーム アウザム のように偉大なムジュタヒドも刑務所に入れられた。イマーム アフマド イブン ハンバル のような偉大なムジャーヒドもクルアーンのたった一つの事柄のために監獄に入った。重い責め苦が課されたにも関わらず、不平を述べることもなく完璧なる忍耐を頼りに、質問の事柄について、しっかりと答えた。

そして数多くのイマーム達、学者達が、あなたがたよりももっとつらい責め苦にあったにもかかわらず、完全に忍耐し感謝し、不動であった。

そうであるなら、あなた方もクルアーンの様々な真実のために、大いなる報奨と褒美を得ているのであるから、あなた方の些細な苦難に対し無限の感謝を捧げるべきである。

さて、人々の苦悩の中に主の恩寵が顕現されることを簡単に説明しよう。

私は 20 歳のころ、何度も語った。「かつて洞穴に閉じこもったこの世を捨てた修行者達のように、残りの私の人生を私も洞穴か山にこもって人間達との関係を絶とう。」始めの世界大戦の時も、北東地域で捕虜として捕らえられていた時、私は覚悟を決めた。「今後の私の生涯を洞穴で過ごすつもりだ。社会生活と政治活動を断とう。もう関わるのは十分である。」といった時、神の恩寵と神の公平なご決定が顕現された。私の決意や望みよりもよりよい方法で、私の老いに対しては慈悲深く、私の想像していた洞穴をこの世と関わらずに独りでいられる刑務所に、そして、孤独の中での厳しい試練の場として監禁された独房という場に（主は）変え給うた。修行者と隠遁者が住む山の洞穴よりもよりすぐれた『ユースフの学び舎』と私の時を浪費させないために独房を与えた。そのほら穴は来世にとって益もあり、信仰とクルアーンの真実へ奮闘努力する奉仕を齎した。それだけではなく、何人かの友人が釈放された後、私はある罪を示し、刑務所に残ろうと決めていたが、フスレブとフェイズィのような独り者は私の傍に残るだろう。又、あるきっかけを作り、人々に会わずに、私の時を無駄話や見せかけの行動や自我の望みなどのために費やさず、独房に入るつもりであった。しかし、主のご決定と私の運命は、他の厳しい試練の場へと私を送った。「善はアッラーの選び給うたものの中にある」

「・・・自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。・・・(2章・216節)」の神秘により、私の老いに対して慈悲深くあられ、信仰への奉仕もより強く活動できるようにと、私の老いと力をよそに、この第3のユースフの学び舎において義務を主は与えたのであった。

さよう、主の恩寵は私の老いを慈悲深いものとした。強く姿をみせない敵を見出すことができない私の若さのために、特別に与えられた私の洞穴を刑務所の監禁された独房に変えることには、3つ英知と「光の書簡集」への奉仕のための重要な3つの益が見出される。

1 番目の英知と益

光の書簡集の学徒達が、この時期結集することは、害のないユースフの学び舎において可能である。お互いを目の前にし話し合うことは、外では、費用もかかり疑いも抱かれる。さらに私に会うために、あるもの達は50リラを支払い、やっっては来るが、20分会えるか、又は一分も会うこともなく戻っていった。私は数人の兄弟達を私の傍で見るために刑務所での苦難を喜んで受け入れた。そうであるなら、刑務所は私にとっては、ある種の恵みであり、慈悲の賜物であるといえよう。

2番目の英知と益

この時期に「光の書簡集」を通して、信仰への奉仕するとは、いたるところでそれら発表し、必要とする者達の注意を喚起することを促すことであった。一種の公示である。

最も頑固なもの達、最も必要としている者達は、それを見出し、彼らの信仰を救う。そして頑固さは消え、危険から救われる。そして「光の書簡集」の学びの環は広がっていく。

3番目に英知と益

刑務所に送られた「光の書簡集」の学徒たちは、お互いの態度や人格から、そして専心さと献身さから教えを受けると共に、「光の書簡集」に奉仕する点でも、この世の利益をもちや捜し求めることはない。さよう、ユースフの学び舎においての多大な努力によって、10の苦難と困難をおそらく、100の物理的、精神的益となる。そのよい結果として、広い信仰心と純粋な奉仕を目の当たりにし完全な専心さを彼らは得ることができたので、もはや小さな個々人の益を考えることはない。厳しい試練に関して、優美で、物悲しく、心にやさしい状況があった。それは次の通りである。

若いころ私の故郷にある古いマドラサで見たのと同様の光景をここでも私は目にした。というのは、東部の伝統に従うとマドラサで学ぶ者達の食べ物の一部は、外から（来るもので）賄われていた。マドラサでは、それらはマドラサで料理された。そして、外のやり方もいくつかも厳しい試練のこの場所のやり方と似ていた。

美しく甘いなつかしさと共にここを見ながら、以前の若く楽しかったころへ旅をしていると想像した。そして私は老いのこのような状態をしばし忘れるのである。





子供の頃から、私は狭い、閉じられた空間が怖くて、そのような場所を徹底的に避けてきていた。後で私は、これは閉所恐怖症として知られる状態であると知った。しかし私はそれを克服することができずに、これまできたのだ。

今私は、いやいやながら閉じられた狭い空間に入らなければならなくなった。私は白布で包まれて、長い棺の中にいる。私はまわりの人たちの声を聞くことができるし、目は閉じられているけれど彼らを見ることがもできる。

「彼はあまりにも早く死んだよ。」と彼らは話し、そしてこうも付け加えた。「やることもいっぱいあったのに。」

私が多くの仕事をやリかけのままで遺したことも、一つの事実だった。私は息子のために立派な会社を設立することも、車とテレビの支払いを終えることもしなかった。もう冬が来るというのに、雨漏りする屋根を修理していなかったし、燃料もまだ買っていなかった。大きな会社を設立して友人達を雇用すると言う夢は、今はもう散ってしまっていた。

突然、私は大きな音に神経を逆なでされた。まるで、マイクで私の全ての脳細胞に反響させているような音だった。

「全て終わりました！」

私は、終わっていなければどんなに良かったかと思った。どうして事故が起こったのか、私にはわからなかった。私は腕のいいドライバーのはずだった。

事故のことを思い出そうとしている時、私は友人達が私の上に板を置いて棺を閉じようとしていることに気がついた。どれほど叫びたくても、私には動くことも、声を出すこともできない。私は完全な暗闇の中で、棺の隙間から漏れてくる光に目を向けた。

恐怖の中で私はつぶやいた。「神よ、私は今何をしようとしているのですか。」

恐ろしさに捕えられて、何も考えることができなくなった。まもなく人々は棺を持ち上げ、私は彼らの肩の上に載せられた。外から聞こえる音で、雨が降っていると分かった。雨のしずくの音が、棺のきしむ音に混ざっていた。私達は葬儀の礼拝の為にモスクに向かっていているに違いなかった。

私は、モスクが近くにあったのに、これまでそこを訪問しなかったことに気がついた。本当は50歳になったら礼拝を始める予定だったのだ。そしてみんなが文句を言っていた、悪い習慣もやめるつもりだった。事故さえ起こっていなければ、私は良い人になるはずだったのだ。

「全て終わりましたよ！」

この声が繰り返し聞こえた。

しばらくして、私の葬儀の礼拝は終了した。モスクのイマームが、私がどんな性格だったか人々に尋ねていた。そこにいた、8人か10人くらいの人は、何も意見を述べなかった。私は自分が彼らに若干の危害を加え、悪事を働いたことを認める。しかしもし事故が起こらなかったら、私は償いをして、彼らに対して与えたことを補償するはずだったのだ。

モスクでの礼拝が終わった後、私は再び肩の上に載せられた。棺の傾き具合から、私は墓場へ上る道を進んでいることを理解した。棺の隙間から雨が流れ込んできて、棺の中を濡らしていた。私は外から聞こえてくる会話を聞き取ろうとしていた。友人達の一部は市場の停滞について話し、また一部は前の晩にテレビで見た洋画の話をしていて、そして棺を運ぶ人の声も聞こえた。

「こいつはなんて悪い日を選んで死んだんだ。俺たちは完全にびしょぬれだ。」

私は自分が聞いたものを信じるができなかった。きっと自分は誤解したんだと思い込んだ。彼らは、私が自分の富と健康を犠牲にした相手ではなかったか？

まもなく私の旅行は終わった。私の棺は地に置かれた。ふたが再び取り外された。私の無力で命のない肉体を担いできた腕は、それを水が溜まった穴の中に入れた。地面の中で、私はあたりを見渡した。

「ああ、神よ。これは墓ではないか！」

私は、その時まで、自分が墓に葬られるのだとどうして気がつかなかったのかわからなかった。誰も私の声なき叫びを聞く者もなかった。親友達は私の体を厚い板で覆おうと、互いに競い合っているようですらあった。

私は再び、完全な暗闇の中にあっただ。私は全身の細胞で祈り始めた。

「ああ、慈悲深い神よ。あなたの本当のしもべとなるチャンスはもうないのですか。」

同じ声が繰り返された。

「全て終わりました。何もかも終わりましたよ。」

私は、板の上で雷のように響く地面の音に揺すぶられた。最後の努力で、私は目を開いた。

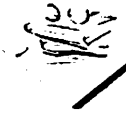
私は居心地の良いベッドに寝ていた。全てが悪い夢だったのだ。医者である一人の隣人が、私のベッドの脇に立っていた。

「全て終わりましたよ。あなたはもう大丈夫。」

私はベッドからゆっくり体を起した。私は20キロくらい体重が減ったように感じるほど、汗びっしょりだった。外ではひどく雨が降っていた。そして家全体が雷で揺さぶられているようだった。

自分の身に起こったことへの当惑から落ち着こうとしつつ、私はつぶやいた。

「ああ、神よ。あなたに感謝します。あなたの真のしもべとなるチャンスをあなたにもう一度いただいていたかったら、私はどうなっていたことだろう。」



『チャーリーとチョコレート工場』 **Charlie and the Chocolate Factory**

今月のこの雑誌のテーマは「節約」だとか。皆さん何らかの自分なりの節約術があると思いますし、奥様系の雑誌には毎号あの手この手の節約術が載っています。節約したお金を生活費に当てるもよし、それだけでたまにの贅沢をするもよし、といったところでしょうか。

ふと考えて見ますと、今まで私の見た映画の中で「節約を実践している」というようなシーンが思い起こされる映画というものは無いような気がします。「生活のために節約をして暮らす話」「節約して貯めたお金を有効に使う感動的な話」というのがあっても良いような気がします。映画の中では（没落することはありません）お金持ちはあくまでお金持ち、貧乏人は最初から貧乏で、慎ましく美しく（又は底辺で）暮らしている話ばかりのようです。たとえそこで節約がされていようとも、表には出て来ないような気がします（もし何か思いついた方は、是非教えてください）。

とはいえ、自分と同じように日々ちょこちょこ節約をしている人の話よりも、自分より「いい暮らし」か「悪い暮らし」のどちらかをしている人を見るほうが、楽しかったり色々な事を考えたりと、映画らしくていいとも思います。

そんな中、手元にお金があまり無い時などに、ふと思い出す映画のワンシーンがあります。それが今回ご紹介する『チャーリーとチョコレート工場』のものです。

両親と両祖父母と共に傾いた家で暮らす少年チャーリーの楽しみは、年に一度、誕生日にもらえるウォンカ印のチョコレート。彼の街にあるウォンカの工場には何年も誰も出入りしておらず、その内情は謎に包まれていた。皆が見る事の出来るものは全世界へお菓子を載せて運んでいくトラックと、店に卸されたおいしく不思議なお菓子の数々だけであった。

ある日、工場のオーナー、ウォンカ氏がこの謎のチョコレート工場に五人の子供を招待すると発表。全世界に売られたチョコレートの中に五枚だけ封入されている金色のチケットを持った子供と付き添いの家族一人につき一人だけが、工場へ入れるのだという。更に五人のうち一人だけが素晴らしい賞品をもらえるのだとか。世界中でチケット争奪戦が行われる中、チャーリーは偶然からそのチケットを得ることが出来、昔ウォンカ氏の下で働いていたというおじいちゃんと一緒に工場のツアーへと向かうのであった…。

チャーリーの家はチョコレートひとつを買うにも苦勞するような家だけれども、とても暖かい家庭で、家族全員が家族想いであるという「絵に描いたような」家です。

私がお金あまり無い時、そして冷蔵庫が空に近い時にいつも思い出すのは、そんな貧しくも素敵な家庭の主婦、チャーリーのお母さんがいつも作っているキャベツのスープの事です。彼女は4人の祖父母（全員の年齢は合計381歳）の介護と家事で手一杯なので働きに出ることも出来ず、毎日のようにこのスープを作って出します。キャベツのスープと言っても、実はほとんど無し。更に家で唯一の働き手である夫が薄給の職を失った時には、「このスープをもっと薄めれば大丈夫」と言い切ります。

観客としては、「見るからに貧相な、スープと言えるかどうか分からないようなこの液体をを更に薄めるですって!？」と驚いてしまいますが、これは本当にうまくチャーリーの家を窮状を表していると言えるシーンです。とても前向きな発言で、ここからも家族の信頼と連帯感のようなものをうかがい知ることが出来ますが、果たして実の無いスープを更に薄くしてまで暮らさねばならないような状況が、私にはあるでしょうか?いくらお金が無いとはいえ、冷蔵庫が空に近いとはいえ、そんなものでも食べなければいけないような状況にあるわけではありません。しかし、世の中にはそうでもしないと生きていかれない人もたくさんいるでしょう。それに比べれば、私の状況はまだまだ何とこと無いものです。生活が苦しいだとか、困っているだとか言える状況にはありません。キャベツのスープにはまだまだ至らないわ…。そう思うと、なんだかぐだぐだと言ってはられない気になってしまうのです。

こんな「節約」はしないに越したことは無いですし、現実はその甘くはないのですが、例え慎ましい暮らしでも与えられたものに感謝し明るく楽しくやっていると、黄金のチケットが当たるかもしれません…?

『チャーリーとチョコレート工場』 2005年 アメリカ/イギリス 115分

監督：ティム・バートン

原作：ロアルド・ダール

出演：ジョニー・デップ（ウォンカ）/フレディ・ハイモア（チャーリー）/ヘレナ・ボナム＝カーター（チャーリーの母）ほか

*この話は二度目の映画化。最初のもは『夢のチョコレート工場』（メル・スチュアート監督/ジーン・ワイルダー出演）といって、1971年のものでした。こちらは『チャーリー〜』と比べると落ち着いた雰囲気、ウォンカ氏も紳士な感じです。見比べてみるのも面白いですよ。

『おいしい生活』 2000年 アメリカ 95分

監督：ウディ・アレン

出演：ウディ・アレン（レイ）/トレーシー・ウルマン（フレンチー）/ヒュー・グラント（デビッド）ほか



質問：いくつものダーウィンの仮説は、反論されており、反証すらされたにも関わらず、ダーウィン説が大衆の一般教養の中に固執する理由は何ですか？

答え：さんざん叩かれ打ち負かされたにも関わらずその死体が繰り返して人為的に蘇生されているダーウィン説のような理論はほかに見当たらないでしょう。一部の科学者はいまだに徹底して同説を擁護しています。他方でそれを固守するのは完全な妄想であるとし、確実に信頼できない説だとみなす科学者たちもいます。学術的な科学の世界においてダーウィン説は、今後しばらくの間は会議の議題をにぎやかし続け、さらに数千の関連記事や書籍が書き下ろされ、議論が続行されるであろうという様相を呈しています。

イデオロギーとしてまた政治勢力としての共産主義が崩壊した後、「東」と「西」は文化的というより地理的な分断であるというのが以前にも増して明らかとなってきています。ロシアでの実験、そして以前のその従属諸国は西欧文化への敵対ではなく、西欧文化内におけるバリエーションの一つだったというのが今も昔も正しい捉え方です。ルソーやルナンに由来する西欧の宗教に対する態度は正確に言えば、社会的に必要な神話としてみなすこと、共同体の生活にある種の文化的・社会的結合を提供する一方で現実的には夢物語以上の何の基盤も持たない妄想、というものでした。明白な宗教の拒否と物質主義の容認の上に構築された東欧（共産主義）の態度は必然的に、（同様の拒否を伴う）ダーウィン説を好み西欧よりもはるかに周到かつ組織的な支持をするものでした。しかし大局的な見地に立つと、全体としての現代西欧文化はダーウィン説の仮説により堅固な基礎を置いており、イスラーム諸国において西欧文化を促進しようと目論む者たちはほとんどの場合大学や教育機関において、ダーウィン説を確立された科学的真実であるとして通そうとし、宗教が非科学的で過ちであることを暗に示そうと画策し続けているのです。こうした毒のいくらかが柔軟な若い頭脳に影響を与えるのは必至です。多くの若者が宗教は人間の理性に適合しないと信じ始め（そう信じ続ける者の数は激減しますが）、種の起源の説明としてダーウィン説は自立した人間の理性が導き出せる今なお最高のものだと信じ始めるのです。

進化仮説について深入りすることはやめておきますが、突然変異を経験しつつ何百年もかけて段階的な変化の過程を経るとされる多細胞生物の問題について少し述べたいと思います。進化仮説の発展した型によると、すべての生物の基礎は水中に存在するアミノ酸であり、それが後に何らかの方法でアメーバのような単細胞生物として組成され、これらの生物は予測不可能な数十億年という年月をかけその時々々の環境下で相互に作用しながら、徐々にもしくは一気に多種にわたる複雑な多細胞動物へと進化したとされています。

それから、魚類が両生類に進化し爬虫類を生み出したように、無脊椎動物は水中脊椎動物へと発展します。その後、脊椎動物の一部は鳥類に進化し、中には最終的に人間の進化にたどり着く哺乳類に進化したものもあるとのこと。

この仮説は概していくつかの不完全な化石の破片を根拠として議論されていますが、今のところ、実際の化石記録はその見解を支持するには至っていません。我々の知る限り、膨大かつ非常に重要な「失われた環」を根拠として正当化されている科学的仮説はこれを除いてほかにありません。観察によって科学者が発見した事柄は、進化論の反対が正しいことを証明しているのです。バクテリアは非常にすばやく状況に合わせて変化しますが、多様性に富んでいる割には他の異なったものや高度なものには進化していません。様々な種類が存在しようとも、ゴキブリや虫はそのままで3億5千万年近くも住んでいるのです。ショウジョウバエは何百万年もショウジョウバエとしてあり続けています。今日の節足動物門、海綿動物、海ガニは5億年前の岩層から発見された化石とまさに同じ姿です。蛇やトカゲ、ネズミやその他多くの種も他の異なる種には進化していません。同様に馬のひづめも人間の足も他の違うものには進化していません。人間は、我々が述べているように創造された最初の日から全く同じなのです。

この仮説が必要とするような過渡的な生物、例えば鳥への変化に備え前足が部分的（全体的ではなく）に翼へと進化した動物など、の例は挙げられていません。さらに驚くことでもありませんが、そのような変異が完成されるまでに何千世代も経る必要があるとしても、なんら理論的な説明もなされていません。部分的に進化した動物がどのような環境の下に生存できるのでしょうか—四本の完全な足もなく、依然完全な二本足と両翼が備わっているわけでもない状態で。

多くの議論で、五本指を持った哺乳類のような小型の犬から一本の指もしくは蹄を携えた現代の大型の馬になったというような馬の進化についての誤った例が示されています。実際のところ、進化論者は主張を支える何の根拠も持ち合わせていないのです。そのような進化の過程を示す一連の化石は世界中のどこにも見つかっていないのです。完全に仮説上の、想像上の出来事として留まっているのです。過去に生存した動物のことを挙げて現代の馬の祖先だと主張しますが、その動物と現代の馬との間になんら必要な関連性を構築できないのです。その関連性を示すのに必要なのは単に、説明が成り立つと思われるような理論を解説することなのです。これは信頼に当たる科学的議論や手続きにまさに逆行しています。そのような動物については神がその時代に創造し、後に絶滅して現在はもう存在しないのだ、と我々は考えます。この二つの種を結びつけて考える必要はあるのでしょうか。今日でさえ、大きさや品種の異なる馬が共存しているのです。

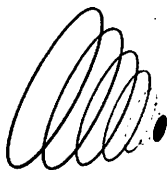
科学者たちは数百万年前のミツバチや蜂蜜を発見しています。ミツバチは1億年前、現在と同じ方法で、幾何学的測定を利用しながら蜂蜜や蜂の巣を作り出していたのです。つまり、この広大な時間を通じてミツバチの脳や生理的構造も蜂蜜の製造法も変化してはいないのです。

人間の進化についてはどうでしょうか。これは特に根拠薄弱でひどい議論がなされています。科学者の中には類人猿の骨の一部や場合によっては歯だけを発見し、残りの部分、すなわち進化した「人間」の体の構造や肉体、肌、髪の毛、容貌を結論付けて（つまり推測して）います。

ピルトダウン人は進化に関連した有名な科学的捏造の好例です。イギリスのピルトダウン近郊で現在の人間の祖先となる類人猿らしき化石が見つかったとされる件が1912年に報告されました。発見の中には、後に現代の人間の頭蓋と類人猿の顎骨と判明する断片も含まれていました。長年にわたってピルトダウン人の化石は人類学的な議論的的となっていました。1953年に科学的分析によって化石が偽物だと判明したのです。

進化論者はかつて、4億年前に大量に生存していたシーラカンスについて、手足のようなひれを持つことから魚と陸上動物を結びつけるものとして言及していました。シーラカンスは食べ物を求めてよめきながら陸に上り、少しずつ長く滞在するようになり、化石記録の消える約7千万年前に至ったのだという説明がなされていました。ところが驚いたことに、1938年にはマダガスカル沖で地元の漁師が何十匹ものシーラカンスを捕獲したのです。捕獲された魚はその祖先と全く同じで、生息環境である深海に完全に適応しており、進化の兆しなど全くありませんでした。シーラカンスは多くの教科書で進化の証拠として載せられたリストからひそかにはずされました。進化のシンボルというより、生物が進化しないことのシンボルとなってしまったからです。

進化論者たちはまた、生物が突然変異を経て進化すると主張しています。新しい細胞が形成されるときに、遺伝情報が通常であれば一つの生物の細胞全体で同一なところを、異なってもしくは間違っ複製されたときに変化が起こるというものです。進化論の果実が実るように長年にわたって少しずつ提唱されてきたそのような変化は、地理や気候、さらには太陽や地球の自転の変化といった地球上の影響、また放射線、化学汚染等の多くの外部からの刺激によって引き起こされるのかもしれませんが。ここで議論となるのは、死には至らず首尾よく（すなわち周辺環境の変化にうまく順応して）繁殖につながる突然変異が、進化の過程での急激な変化のように機能し、種の変異を引き起こすというものです。

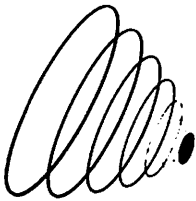


しかしながら遺伝学と生物化学における近年の研究によれば、突然変異が常にといいほど有害で死を招くことさえあり、多くの生理学的な失調の原因となることが決定的に示されています。いずれにせよ、犬が馬になったり類人猿が人類になったりするような新たな種を生み出すような秩序の重大な変化を引き起こすことはできないのです。なぜならそのような変化の順序が無作為に発生しその後順調に定着するには、宇宙年齢の最高の推定値を数倍も上回る時間が必要となるからです。

長年にわたって、鳩や犬、ハエに関する多くの研究がなされてきています。同類の動物のうちである種の生理的な変化が起こることは実際ありえることですが（例えば異なる品種の犬や鳩がいます）、そのよう

な種の中での適応進化は種の進化の証拠にはなりえません。何年も続けられたショウジョウバエに関する広範囲の研究は実を結ばず、研究はショウジョウバエが変わらずショウジョウバエに過ぎないことを証明したのでした。

馬とロバなど二つの異なる種を人工的に交配することによって雑種が得られますが、その結果生まれるその交配種（ラバ）は概して不妊となります。徹底的な研究の結果、科学者たちは一つの種から別の種へと進歩するのは不可能だと認識しました。異なる種の間には乗り越えられない、行き来できない壁が存在するのです。これは既知の事実、科学的推論に一致するのと同様、ごく普通の道理にかなっています。人間のように極めて高度な脳を有し、言語や文化による表現ができ（文明の種類、段階に関わらず）、宗教的な信仰や願望を持てる生き物が、猿から進化し得ましようか。その可能性に関する推測が大真面目に検討されるなど奇妙極まりないことです。ましてや理にかなっていると信じられたり受け入れられたりすることについては言うまでもありません。



しかしながらそうした進化についての容認は現代の物質主義、そして歴史的な物質主義、特にマルクスとエンゲルスがしつこく主張したものの主要な柱をなしています。それは物質主義者がダーウィン説に固執する最も露骨な形態の妄信、偏見、そして迷信です。彼らは無条件に全てのものが物質的な原因で説明付けられると主張しています。限られた手段しかなく説明のつけられないことに関しては、説明できないことをあえて認めようとはしません。生物の世界を成り立たせるために、驚くほど豊富で多様な、かつ局所的な環境の可能性に応じて安定した形で見事なまでに順応的・万能的に媒介する超自然的、霊的な作用があることを彼らは決して認めようとはしません。

進化に取って代わるものは設計です。それは並外れた単一の力、設計者である創造者、つまり神という概念に必然的にたどり着くものです。そこにはダーウィン説の専制が引き続き存在していることへの理由があります。それは創造主を認めることは自立した科学の体系、自立した人間の理性を破滅させるとの恐れです。それぞれの科学者は個人的な立場では信仰者、有神論者でありえますが科学そのものは信仰心を持たず無神論でなければならないのです。自立した人間の理性という幻想を維持するためにダーウィン主義者（そして一般的に唯物論者たち）が事実と逆らい、もしくは無視し、論理と道理を拒否し軽視するとは実に皮肉なことです。科学者個々人が今までにも増して、生命科学の教授におけるダーウィン説の専制を疑問視し異議を申し立てる勇気を持つことが科学界の信用にかかっています。

とは言うものの、若くて影響を受けやすい知性の中には、ダーウィン説が公式な教義でありどこへ行っても教科書ではこのテーマに関する定番となっているということだけで、その神話に対して脆弱だということも残念ながら事実として続いています。「間抜けは気軽に真珠を井戸に投げ込むが、40人の賢人はそれを取り戻そうと無駄骨を折る」というトルコのことわざのいかに適切で的を得ていることか。しかしながら、

嘘はどんなに強固に支持されようとも短命に終わるということも知っているのです、そこに慰めを見出すこともできます。この真実は、種の起源や種の主だった区分がどのように発生したかはまだ理解されていないということなのです。「我々は驚嘆する、しかしながら知らない」と謙虚に言うことは耐えられないほどの重荷となるのでしょうか。ついでながら我々は、高度な言語活動や観念作用、抽象作用、記号化、文化、美や多様性を愛すること、意識、利他主義、道徳性、宗教、そして精神的な熱望といった事柄に最も驚嘆しますが、かつそれらについて最も理解することができていないのです。

ダーウィンが、種の分類などに非常な貢献をしたことや適応に関する研究によって認められるべき優れた才能ある科学者であったことは確かです。しかし彼がなしたとして明らかなこと、素晴らしかったことは、自然に存在したものを正確に観察し理性的に理解することだったという点に注意するべきでしょう。

彼自身の意図がなんであったとしても、それにも関わらず彼の業績は、観察と説明において信頼に値する向上が見られる他のものと同様に、自然を運用するにあたって素晴らしい構成、信頼に値し組織的で微妙に統合の取れた調和を意図し、その秩序と美を一体化させた神聖な設計者、全能者、持続者、統治者のことを裏づけているのです。ダーウィンの発見したものは我々の神に対する信仰を深める一方で、彼自身の道を見失わせてしまったのでした。

創造者はなんと偉大で崇高なのでしょう。秩序、理解、英知は彼の恵みによるものです。同様に、信仰への導きは完全に彼の手の内にあるのです。





ドゥア（祈り）のある毎日へ

かれ以外に逃れられない、かのお方

かれ以外に身を預けられない、かのお方

かれ以外に避難できない、かのお方

かれ以外に身を任せられない、かのお方

かれ以外に目的はない、かのお方

かれ以外に救いを求められない、かのお方

かれ以外に懇願できない、かのお方

かれ以外に服従できない、かのお方

かれ以外に援助できない、かのお方

かれ以外に力を望むことができない、かのお方

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、

あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。³



レシピーコーナー

チョバンサラダ

材料 4人分

トマト 2こ きゅうり 2本 玉ねぎ 1/2こ パセリ 適量

ドレッシング

レモン汁 少々 塩 少々 油 少々

野菜類すべて小さく切る。次にドレッシングを作る 作ったら野菜にかけて出来上がり

³ジャウシヤン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、（ジャウシヤスカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。ジャウシヤン・カビールのアラビア語/日本語訳オーディオ CD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



浪費と吝嗇の間の中道—無駄遣いせずつましく生きること

2006年 Yemi Unit より、By Dr. Muhsin Toprak

浪費と吝嗇の間の中道—無駄遣いせずつましく生きること：

人の行動は、自我の深いところに位置する、一部は遺伝によるもの、一部は後天的なものである複数の性質が方向付ける形で、表に現れます。自我を形成するこれらの性質が語られることで、人に関する価値の判断が意味を持つものとなります。これらの一部はプラス的なものであり、一部はマイナス的なものです。人の様々な振る舞いを分類するなら、これらは一般的に三つの概念として説明することができるでしょう。このうちの二つは過度と不足であり、三つめがその中間、中道です。

人の経済的な振る舞いを表現する、浪費する・けちである・つましいという概念もまた、そういったグループを形成するものです。

浪費すること、けちであることは恥、低俗さと見なされ、つましいことは徳と見なされる性質に含まれます。

浪費とは節度なく費やし、散財すること、目的もなく、あるいは不正な目的の為に金を使うこと、不適切なところで、必要以上にお金を使うこと、度を越すこと、という意味を持つものです。この意味に対応するクルアーン上の表現は「テブリズ」という語であり、これは「無駄使い」という意味になります。

けちであること、吝嗇であることは、必要性を満たすために十分なだけの費用をかけず、それが無いふりをしたり、財産を正しい道で使おうとしないことを意味します。クルアーンでは「シュフ」という語が一番目の意味で、「プフル」という語が2番目の意味で用いられます。無駄使いとけちとの間の中道が、つましくあることです。

アッラーが好まれない二つの振る舞い—浪費と吝嗇：

経済的な源を節度なく費やすという意味を持つ浪費と、けちであることは共にアッラーが好まれない振る舞いに含まれるものです。この世界を、全ての恵みと共に私たちの益のために与えてくださった崇高なる主は、人に、この世における源を節度を持って使うように命じると共に、度を越した散財、そしてけちに振舞うことをも禁じられ、さらには、浪費する者もけちである者も愛されないことを明らかにされています。

高壁章第31節においてアッラーは、「アーダムの子孫よ、何処の masjid でも清潔な衣服を体につけなさい。そして食べたり飲んだりしなさい。だが度を越してはならない。本当にかれは浪費する者を御好みにならない。」と命じられておられます。またイムラーン家章の第180節では、「アッラーの恩恵によって与えられたものを出すのを嫌う者に、自分のためにそれが有利だと思わせてはならない。いや、それはかれらのために有害である。かれらの出すのを嫌ったそのものが、復活の日には、かれらの首にまつわるであろう。」とされ、財産をアッラーの道の為に差し出すことを嫌う人たちの、審判の日の困難な状態を明言しています。また婦人章第36節で、父母に懇切を尽くし、また近親や孤児、貧者や血縁のある隣人、血縁のない隣人、道づれの仲間や旅行者、そして奴隷達に親切であることが命じられ、37章では吝嗇である者、他者

にも吝嗇を勧め、アッラーが彼らに与えられた恵みを隠す者をアッラーは愛されない、ということが、はっきりと厳しいことばで指摘されています。

必要性を満たすために費やされる恵みの量：

人間の必要性というものは、経済学者たちの言うように無限ではありません。だから必要性を満たすため、無限に資源を使う必要はないのです。限りのないのは欲求や欲望です。人は欲求や欲望を満たすために、必要を満たすだけの量よりもさらに多くを求めます。預言者ムハンマドはこの真実を、「人は、谷を埋めるくらいの財産を持っていたとしても、もう一つの谷を埋めるだけのものを求める。」というハディースで説かれておられます。

必要性が満たされるために十分なだけの資源を費やすことは儉約・無駄のないことであり、足りるだけの量よりも多く費やすことは浪費です。必要なだけの量よりも少なく用いることは吝嗇です。これはイバードのために用いられる資源に関しても当てはまります。この最もよい例が、ウドゥーに関して預言者ムハンマドがなされた警告でしょう。ある時預言者ムハンマドは、サアダを訪問されました。サアダはその時、ウドゥーを行なっていました。預言者ムハンマドは、彼が必要以上に水を使っているのを見られ、「この無駄使いはどういうことか。」と尋ねられました。サアダが「ウドゥーでも、無駄使いになるのですか。」と尋ねると、「そう。さらに言うなら、流れる川でウドゥーを行なったとしても、そうなるのだ。」と答えられました。

ただし、必要性という言葉に関しては、単に飲み食いや服を着ることのような、個人的な必要性として理解されるべきではありません。宗教的、民族的、集团的、家族に関わるものや、職業上の任務を実行するために必要なものもまた、必要性のリストに加えられるものです。時として人は、個人的な必要性をシンプルで経済的価値の低いもので満たすことができるのに対し、集团的承認や社会的立場などが求めるものはより複雑であるため、経済的により高価なものを使用する必要に迫られることがあります。このような状況で費やされたものは、浪費とは見なされません。例えば、人はシンプルで安い布で体を包んで身を覆うこともできます。しかし集团的承認やその集団におけるその人の立場により、そのような着方はできないのです。この場合もその分多くの資源を必要とすることになりますが、それは浪費とは見なされません。さらには、慣習に従って、社会的立場に応じた形で身を覆うという必要性を満たさない場合は吝嗇と見なされるのです。

アッラーの恵みをしもべたちが用いることは、アッラーのお気に召す行為です。預言者ムハンマドはある聖ハディースで、「浪費や見せかけにならないことを条件に、食べなさい、衣装を身につけなさい、喜捨を施しなさい。アッラーは、ご自身の与えられた恵みをしもべたちのもとで見ることをお気に召される。」とおっしゃられました。

ただ、個人的な理解も、社会的な立場も、そして集団における承認も注意深く見れば、必要性を満たす境界線ははっきりしたものではなく、非常に広い幅を持つものであることがわかります。これは、必要ではない多くのものが必要だと見なされたり、必要性を満たすために均衡のとれていない消費が行なわれることへの要因となりえます。十分な量というものがどれくらいなのか判断するのが知性です。知性とは、理解し、把握し、判断するものであり、何が浪費でどういうのがけちなかを判断するのも知性なのです。従ってここでは知性が審判員の役割を持ちます。ただ、知性は、気の向くままに、利己的な判断を下すことがあるということを考慮するなら、それを制限するもう一つの要素が必要となります。それが良心です。人にとって必要性があると思えるものでも、社会全体の状況を考えると、良心の呵責を感じさせるようなものがあ

りえます。知性が、これは浪費ではないと判断を下した場合でも、それを実行して気楽に過ごすことに対し、良心が許可を与えないのです。「隣人が空腹でいる時、満腹して眠る者は私たちの仲間ではない。」という聖ハディースは、良心の果たしている役割を明らかにするものです。

アッラーの道で財産を費やすことにも行き過ぎはあるのか

アッラーの道において、あるいはアッラーのご満悦を得るために財産を費やすことにも、浪費、無駄遣いはあるのでしょうか。どの程度それを行なうと、使いすぎたことになるのでしょうか。

クルアーンでは様々な章句でこの件に言及し、人が他の人をあてにして頼らなければならないほどにその道で財産を費やすことは行き過ぎであるとしています。家畜章第141節では、「実が熟したならば食べなさい。収穫の日には、定めのご喜捨を供出し、浪費してはならない。」とされています。ここでの「浪費してはいけない」という言葉は、「喜捨を供出することにおいて浪費してはいけない、つまり、行き過ぎがあってはならない。」という意味だと解釈されています。この点に関しては次のような出来事が伝えられており、またその出来事がこの章句が啓示された原因であるとされています。

サビット・ビン・カイスは、収穫時期になると、人々に自由にナツメヤシの農園に入らせ、作物をとらせていました。しかし全ての作物が持っていかれてしまい、その家族に何も残りませんでした。そしてこの章句が下され、中道を行くことが勧められたのです。

夜の旅章第26・27・29節では、「近親者に、当然与えるべきものは与えなさい。また貧者や旅人にも。だが粗末に浪費してはならない。浪費者は本当に悪魔の兄弟である。悪魔は主に対し恩を忘れる。あなたの手を、自分の首に縛り付けてはならない。また限界を越え極端に手を開き、恥辱を被り困窮に陥ってはならない。」とされ、アッラーの道で財産を費やす際にも中道を行くことが命じられているのです。

識別章第67節では、「また（財貨を）使う際に浪費しない者、また吝嗇でもなく、よくその中間を保つ」という性質を、信者のものとして明言しています。預言者ムハンマドも、「サダカのうち価値のあるものは、本人を貧しく、他の者の助けを必要とするような状態にはしないだけのものである。」とおっしゃられています。またこの件に関しては、預言者ムハンマドが、財産の全てをサダカとして差し出したり、遺言にしたりすることを禁じられたことが伝承されています。

つましさの徳

つましく生きることは、いくつかの観点から美德といえます。まず、無駄をしないよう振舞うことは、アッラーの徳によって徳を備えることを意味します。なぜならアッラーは、創造においてそのように振舞われ、またこれに適した形で、この世界を、無駄がないという原則が支配しているのを目にすることができます。第二に、つましく振舞うことは、恵みに対して敬意を示すことを意味します。従って精神的なアッラーへの感謝となるのです。浪費はこの逆で、恵みを軽視することを意味するのです。第三に、中道とは、人が生きていく上でのあらゆる場面で有益な、安全地帯のようなものです。だから人間にとって徳と見なされるのです。人の行動や振る舞いが中間を保っていれば、正しい道を見出したことになり、多くの危険から守られることにもなるのです。無駄遣いをしないことは、経済的な資源の消費における中道であり、これ自体

が一つの徳なのです、預言者ムハンマドも、「人が中道を行くことができるのは、その人の知性による。」というハディースで、生きていく上であらゆる点で中間を保つことを勧められ、またご自身もそのように生きられました。教友の一人は次のように語っています。「私はアッラーの使徒の後ろで礼拝をしていました。あのお方の礼拝も、フトバも、中位の長さでした。」

さらに、人間の名誉が守られるという点でも、美德が寄与する部分は非常に大きいものです。この点についてベディウヅマン師は、一つの小話を通して次のように説かれています。ある時、その気前のよさで知られているハーテミ・ターイに、「あなたは自分よりももっと愛情ある人をご存知ですか。」と尋ねます。彼は答えます。「そういう人を知っています。年老いた人でした。私の客たちに、贈り物を添えて晩餐会を開いていた日のことです。私は外に出ていて、年老いた貧しい人に気がつきました。とげだらけの雑木や薪を、その背に背負い、運んでいました。とげがその体に刺さって、血が流れていました。私はその人に、『ハーテミ・ターイが贈り物を添えて晩餐会を開いています。あなたもあそこに行ってください。いくらもお金にならないこの雑木のかわりに、ずっと価値のある贈り物がもらえますよ。』その老人は言いました。『私はこのとげだらけの荷を、誇りを持って背負っています。誰の恩も受けるつもりはありません。』砂漠で偶然に出会ったこのつましい老人が、私よりももっと愛情にあふれ、もっと気高く、もっと気前がよいと思ったのです。」

つましさと、けちであることとの違い

つましく振舞うことは、時としてけちであると見なされることもあります。つましく振舞うことは、けちであることなのでしょうか？

もちろん、つましさと吝嗇とはそれぞれに異なるものです。ベディウヅマン師はこの二つの間の違いについて、一見似ているように見える謙遜と卑下、威厳と自負の間の相違点について触れつつ、次のように説かれています。「つましさと吝嗇の間には大きな違いがある。謙遜は、悪い徳の一つである卑下とは意味が異なるが形としては似ている、誉められるべき行為である。また威厳は、悪い振る舞いの一つである自負と、意味は異なっても形は似ている、誉められるべき行為である。これらと同様に、預言者の素晴らしい徳の一つであり、この世界における神の英知の秩序の顕現でもあるつましさもまた、低俗であること、けちであること、欲深いこと、欲張りであることなどの混ざり合った状態である吝嗇さとは何の関係もない。ただ形として、似ている部分もある。」

師は、つましさとけちの間の違いを、教友の生き方における出来事について触れつつ、次のように説明しています。「教友で、七人の著名なアブドゥッラーのうちの一人であるアブドゥッラー・イブニ・オメル、すなわち、アッラーの使徒の後継者である、ファールク・アザーム・ハズレティ・オメルの最も偉大な息子であり、教友たちの中でも最も選ばれた存在であるこの祝福された人が、市場で買い物をしている際、わずかな金額をめぐる、つましさと、商売における信頼や方向性を守るために、激しい口論をしていた。一人の教友がその様子を見て、地上における後継者であるオメルの息子が、わずかな金額のために口論することが、けちな振る舞いではないかとの思いに襲われ、その後についていってその状況を理解しようとした。アブドゥッラーは、祝福されたその家に入っていった。入り口で、貧しい男に会い、しばらく共にいた。それから、その家の別の戸口から出て、そこでも別の貧しい男と会い、しばらく一緒にいた後、離れていった。遠くからそれを見ていた教友は気になって、その貧しい男たちに尋ねた。「イマームはあなたたちと一緒にいたが、何をなさったのか。」両者とも答えて言った。「私に金を与えてくださいました。」

教友は言った。「アッラーに讃えあれ！市場でわずかな金額の為にあれほどの口論をして、家に戻って

から誰にも気づかせないうちにこれほどの金額を、我欲に完全に承認させた上で施されるとは！」そしてアブドゥッラー・イブニ・オメルに会い、言った。「イマームよ！私のこの難題を解いてください。あなたは市場ではこのように振る舞い、家ではこのようにされました。」彼への返事は以下のものであった。「市場での振る舞いは、つましさと知性と、そして物のやりとりの基本、精神である信頼と誠実さを守るためにとった態度である。家での振る舞いは、心の慈しみ深さと魂の完全さからもたらされたものである。前者は吝嗇ではないし、後者も浪費ではない。」

イマーム・アザームはこの真実をさして、「善行と奉仕においては（ただし正当な権利の保持者に対して）浪費はありえないのと同様、浪費においては一切、善が含まれない。」と語っています。

結論

つましく生きることは、中道を行くことを意味する振る舞いです。儉約は恵みへの敬意であり、恵みを与えた方への感謝の表明でもあります。同時に人の誉れを守る美德でもあります。だからアッラーが好まれるのです。経済的資源を過剰に費やすことを意味する浪費や無駄遣いと、資源を十分に利用せず隠すことを意味する吝嗇とは、アッラーが好まれない行為です。人はその必要性を満たそうとする際、自らにとって安全地帯である中道をたどるべきです。何が必要で、その必要性を満たすためにはどれほどの資源を用いるべきかということは、知性と良心によって自ら決めるべきことなのです。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

（2004年、2005年、2006年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み 2500円）

郵便振替口座番号：00100-6-354012 口座名義：月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号：630（春日部）口座番号：1134374 口座名義：月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

「やすらぎ」編集部